# 《文語詩稿》定稿化の方法（プロセス）・試論

## ― 北村透谷「宇宙の精神」と、宮沢賢治「宇宙感情」と ―

島田隆輔

### はじめに

宮沢賢治最晩年の営為のひとつに、《文語詩稿》（草稿から定稿に至る過程を括ってこう表示する）の制作があった。

それは、一九二八（昭和三）年以来の闘病生活に、やっと小康が訪れた三〇（昭和五）年頃から本格的になったもので、はじめ自分史ふうのメモを三〇年八月までの編年体に記した『文語詩篇ノート』によって主導された。確かにこの段階の作品には（初期、初期稿と仮称する）、たとえば詩の舞台に「私」が登場しているものが多くあり、文語詩による自伝の構想が、その制作動機のひとつとしてあったようにみえる。

三一（昭和六）年になると、東北砕石工場技師として石灰肥料の普及に携わりつつ、《文語詩稿》初期稿は書き継がれていたが、その九月に再度の発症によって、途絶する。以後、死病を背負った宮沢賢治が、病床を離れることはなかった。

ところが、そういう情況のなか、三二（昭和七）年には、《文語詩稿》制作が再開されたのだった。しかも、この段階から現われてくる作品には（再編、再編稿と仮称する）、たとえば「私」が登場しなくなるという傾向がみえ、題材も三〇年八月以前にかぎられない、いや、時期不詳の自伝性を超えた詩の場が構築されてゆく。

そうして、三三（昭和八）年の夏に、ふたつの文語詩集が定稿集として成立するのである。

本稿は、詩人宮沢賢治が《文語詩稿》を定稿化してゆく方法（プロセス）を、定稿を収容した和紙表紙の詩人による書きつけをてがかりに、探究しようとする。ただ、それが方法（プロセス）の一端にかぎられて、せいぜい見とおしをたてる、というあたりにとどまるのであろう。

### 1　想は定まりて表現未だ定まらず

てがかりというのは、次のふたつの文言である。(1)

ひとつは定稿集『文語詩稿五十篇』の和紙表紙に書かれたもので、

本稿集むる所、想は定りて表現未だ足らざれど／も現在は現在の推敲を以て定稿とす。

とある。いまひとつが、『文語詩稿一百篇』に書かれた、

本稿想は定まりて表現未だ定らず。／唯推敲の現状を以てその時

々の定稿となす。

というものだ。

これらふたつの文章がはらんでいる意味の差異については、いまは問わず、

詩想は定まって、詩本文のほうの表現がまだ不足なあるいは定まらないので、現段階の推敲本文をもって定稿としておく。

という骨格のほうに注目をしたい。ここにうかがえるのは、詩人の《文語詩稿》における定稿化の方法（プロセス）が、「想」の成熟を承けて「表現」がそれを追う、というものであったらしいことだ。したがって、定稿とはいいながらそれはいわば括弧つきのものであって、実質は「現在の推敲／推敲の現状」にすぎない。

にもかかわらずなお、詩人がそれを「定稿」とし、詩集にまで編んだのは、どうしてか。もし、その死期の間近なるを予感したからだと、澄ました顔で答えるのならば、その一月ほど後に死を迎える事実をわれわれがあらかじめ握っているからにちがいない。そうではなくて、詩人にはそのような方法（プロセス）をとる必然のようなものがあった、とは考えられないか。その立場からすれば、詩人は死病を背負いながら、なぜ《文語詩稿》の再編に向かったのか、という問いからまず答える必要がある。

そのことにかかわっては、《文語詩稿》を途絶させた三二年の闘病生活のなかに示唆もあるはずで、実際にそのときどきの心境を記録した『雨ニモマケズ手帳』を読んでみると、次のような一文が刻みつけられていることを知るのである（44～46ページ）。

厳に日課を定め
法を先とし
父母を次とし
近縁を三とし
［社会↓・］農村を最后の目標として
只猛進せよ　（10・29の項）

見過ごせないのが、「［社会↓・］農村を最后の目標として」という点だ。これが最終に位置づけられてあるにしても、法（法華経）・父母・近縁に少なくとも並び立っており、「只猛進せよ」と、そこに立ち向かうことを「厳に」命じられているのである。

花巻農学校の教師として、羅須地人協会の主宰として、そして東北砕石工場の技師として、宮沢賢治の後半生は農村／農民の生活改革に向かうことに費やされた。けれども、すべてに挫折したいま、死病に耐えている身では、その病床で肥料設計に応ずることくらいしかもうなく、三二年以降、死の前日までそれは果たされている。[2]

ところが、同時に詩人は、「グスコーブドリの伝記」を発表し（三二年）、「風の又三郎」に手を入れる（三三年）などの童話創作に執着しており、また心象スケッチの整理（『春と修羅第二集』の再編）に加えて、《文語詩稿》の再編にも向かっているのだ。

肥料設計ほど直接的なものでないにしても、農村／農民の生活改革が世の中の意識改革をも必要とするものであってみれば、読者を前提としているだろう文学的営為もまた、「猛進」すべきことのうちにあった、といえるのではなかろうか。すると、《文語詩稿》の再編もそのひとつである、ととらえることができよう。

## 2　「農民芸術概論綱要」の存在

この《文語詩稿》が、

［社会↓・］農村を最后の目標として
　只猛進せよ

という覚悟に根ざしたものであるとき、詩人宮沢賢治が農学校教師を辞して、農村という現場にはじめて踏みだした二六（大正一五）年の出来事が結びついてくる。

そこで立ちあげた羅須地人協会という活動は、「新しい農村の／建設に努力する」（『岩手日報』二六・四・一付）ものとして周囲からも認識されていた。もちろん、思いつきではなかった。宮沢賢治には、その一月から三月にかけて開催された、農村青年の育成を目的とした岩手国民高等学校における講義「農民（地人）芸術概論」を整理・発展させた、農民生活の改革原論ともいうべき「農民芸術概論綱要」[3]という、序論と結論を併せ１０章にわたる構想をこの年に手にしていたからである（以下「綱要」とする）。したがって羅須地人協会活動も、

　おれたちはみな農民である　ずゐぶん忙がしく仕事もつらい
　もっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい

という「綱要」の〈序論〉を実践したものに位置づけられるのである。

だが、二七（昭和二）年には「思想問題」（『新校本宮澤賢治全集』第十六巻年譜篇一月三一日の記述）に発展したためこの活動の縮小を余儀なくされる。そこで、農業技師・装景者として地域の肥料設計や花壇工作などに専念することによって、改革プランの達成にわずかでも近づこうと努めるが、二八年の夏に結核を発症、やがて病床に就いてその活動は潰えてしまった。

それでも、かろうじて小康を得た三一年、あらためて農業技師として、かつて盛岡高等農林学校で関豊太郎博士に学び、その実現を嘱望されていた農地の土壌改良のために、石灰肥料の普及・販売に立ち向かう。無謀にも、岩手はもちろん東北各地を奔走し、結果として、起死回生を期したこの活動もまた、九月、病に再び倒れて途絶したのである。

そうした挫折と死病との闘いのはてに、

［社会↓・］農村を最后の目標として
　只猛進せよ

と覚悟を定めて、その残生を農村に向かって燃やし尽くすことを決意したのである。とすれば、三二年以後の《文語詩稿》の再編に立ち向かう詩人に、農村とまさに向き合おうとしたかつての「綱要」が鮮明によみがえってきたとしても、けっして不思議ではない。

## 3　練意了つて表現し定案成れば完成せらる

「綱要」全体の本意を、具体精密に解く余裕がいまはないが、《文語詩稿》定稿化の方法（プロセス）にかかわりがあるとみられる点について、指摘しておきたい。

まず、「綱要」は、〈農民芸術の本質〉として、

　農民芸術とは宇宙感情の　地人　個性と通ずる具体的なる表現である

そは直感と情緒との内経験を素材としたる無意識或は有意の創造

である

という。

「宇宙感情」は、「綱要」の〈結論〉にみえる「銀河系を包む透明な意志」にも言い換えうるもので、宇宙意志といってよい。〈序論〉の「自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する」という認識からして詩人にとっては最高位にあるもので、人の個性による表現と宇宙感情とが「具体的」に通じあうこと、それを芸術の本質だという。そのうえで「直感と情緒との内経験を素材」にするのだという。「直感」とは、やはり〈序論〉にいう「銀河系を自らの中に意識」することであり、その直感に地人の生活感情（情緒）が応じたときに生じる内部の経験、それを「素材」にして、「無意識或は有意の創造」―これは無意識の創造から有意の創造への意ととっておくが―、そこに向かうことによって、「具体的なる表現」は得られるというのだ。

では、無意識あるいは有意の創造過程とはどのようなものか。「綱要」〈農民芸術の製作〉では、宇宙感情を「感受した後」に、

諸作無意識中に潜入するほど美的の深と創造力は加はる

機により興会し胚胎すれば製作心象中にあり

練意了つて表現し　定案成れば完成せらる

といい、そこでは、「無意識或は有意」の過程が、次のように分節されていて、内経験（素材）が熟成されつつ無意識中から心象中に至ったところで「有意」となって現われてくる、といっているようだ。

| ・無意識中 | ・心象中 |
|---|---|
| 美的深と創造力　↓　興会と胚胎（→有意） | |

しかし、製作の要諦はその「意」をどう具体化させるかにあるから、「練意了つて表現し　定案成れば完成せらる」（傍点は島田、以下同）というところに、芸術成立の決め手があろう。

それは、

・練意了つて　↓　・表現し

・定案成れば　→完成せらる

ということで、成立までに二段階を踏むことになる。

このように読みとりうるならば、芸術の生成過程において、自らのうちに直感された「宇宙感情／意志」に応じて、それがしだいに言語のかたちをとり、表現の獲得に向かうのには、「意を練り了える」必要があり、過程としては「意」が「表現」よりも先に確立されなければならないということになろう。このとき、先に引用した《文語詩稿》定稿和紙表紙の文言を、呼び起こさせはしないか。

すなわち、次のような並置の試みが浮上してくるのである。

練意了つて　表現し　（農民芸術の製作）

想は定りて　表現未だ定らざれども　（『五十篇』）

想は定まりて表現未だ定らず　（『一百篇』）

これを認めれば、農民芸術と定稿化に向かう《文語詩稿》の製作／制作の作法とは、

意　↓　表現　（農民芸術の製作）

想　↓　表現　（《文語詩稿》定稿化）

という同一の方向性をもっているといえるのではないか。

あるいは、やはり和紙表紙の文言に、

現在は現在の推敲を以て定稿とす。　（『五十篇』）

唯推敲の現状を以てその時々の定稿となす。　（『一百篇』）

ともあった、真の定稿にはなかなかたどりつけないだろうという詩人の自覚も、「定案成れば完成せらる」の、成れば-せらるという苦衷をにじませた言いまわしにこめられている完成に至ることの困難さに呼応しており、これもどうやら両者のありようが重なっている。

「想」を定立してさらに「表現」を高めてゆくという《文語詩稿》定稿化の方法（プロセス）は、「綱要」の応用であったといえそうである。ただし、その困難な道程を、

求道すでに道である　〈序論〉
永久の未完成これ完成である　〈結論〉

と言い添えて、立ち向かってゆく過程そのものに意義あることをはっきり示してもおり、完成が崇高なる達成と位置づけられて、そこに至ることの尊さを強く印象づけている。応用は近道ではないのだ。意／想は、表現と出合うことによってさらに深められ、深化した意／想がますます表現を巧みにしてゆく、という往復と反復の運動が、そのの ちにも延々と展開されてゆくのであろう。

たとえば、《文語詩稿》定稿におけるそうした反映のひとつが、定稿用紙上で、二段階にわたるさらなる本文手入れがある、という現象であったと考えることもできる。

## 4　宇宙の精神即ち神なるもの

《文語詩稿》定稿化の方法（プロセス）に、「綱要」の態度が反映しているとして、注意すべきなのが、両者の重なる要、あるいは始発に位置しているであろう「宇宙感情」という認識であろう。宮沢賢治は、その半生を、久遠実成の本仏を独自に説く法華経の教えの信行に徹したから、法華経を基軸にした仏教的世界観また宇宙観からその認識が出ているとみて、まちがいあるまい。

たとえば、次のような考え方である。

たゞひとつどうしても棄てられない問題はたとへば宇宙意志といふやうなものがあってあらゆる生物をほんたうの幸福に齎らしたいと考へてゐるものかそれとも世界が偶然盲目的なものかといふ所謂信仰と科学とのいずれによって行くべきかといふ場合私はどうしても前者だといふのです。すなわち（ママ）宇宙には実に多くの意識の段階がありその最終のものはあらゆる迷誤をはなれてあらゆる生物を究竟の幸福にいたらしめやうとしてゐるといふまあ中学生が考へるやうな点です。

（書簡252c下書四、二九年頃と推定、傍線は島田）

ここには、六道あるいは十界を輪廻転生するという仏教の基本的な世界観・宇宙観がその背景にあって、それは、仏教を受け容れてもう長い日本人の感覚としてそれほど特異なものではないように思える。ただあえて宮沢賢治らしさを見いだすとなれば、

あらゆる生物を究竟の幸福にいたらしめやうとしてゐる

というような了解の仕方であろうか。

そして、芸術／文学ということについて、宇宙意志の直感／感受から創造の途に就く、という原理もまた、この詩人の独創であったわけではけっしてない。先人の一人として、たとえば北村透谷がいる。

透谷はその「内部生命論」[4]において、「アイデアを事実の上に加ふるものは文芸上の理想派なり。ゆゑに文芸上にては殆どアイデアと称

すべきものはあらざるなり」と断言し、「其の之あるは」「瞬間の冥契なり」として、

瞬間の冥契とは何ぞ、インスピレーション是なり、この瞬間の冥契ある者をインスパイアドされたる詩人とは云ふなり（中略）畢竟するにインスピレーションとは宇宙の精神即ち神なるものよりして、人間の精神即ち内部の生命なるものに対する一種の感応に過ぎざるなり。（中略）

この感応は人間の内部の生命を再造する者なり、この感応は人間の内部の経験と内部の自覚とを再造する者なり。

と説明している。

透谷が、「宇宙の精神即ち神なるものよりして」とストレートにことばを継いでいるあたり、そこに絶対的な信をおいた素朴さといったものを私はみ、そこにも「まあ中学生が考へるやうな」といった宮沢賢治の純情さが重なってくるように思うのだが、それ以上に、透谷が示している、

宇宙精神↓冥契・感応↓内部の生命・経験・自覚を再造する

とでも整理しうるだろう宇宙精神のみちすじに、

宇宙感情↓直感・感受↓情緒との内経験を有意へと創造する

という、「綱要」における〈農民芸術の本質〉のみちすじとほぼ符合しており、**inspired** されたふたりの詩人が、その宇宙精神／感情を、言語をもって「想」を有意な〈想〉に形成して、その「表現」へと展開してゆく工程は、ほとんど重なり合うようにみえる。

また「内部生命論」に先行・密接するもので、

宇宙に精神あるが如く人間にも亦た精神あるなり、而して人間個々の希望は、宇宙の精神に合するにあり、人間世界の最後の希望は全く宇宙の精神に合体するにあり。（「頑執妄排の弊」）[5]

という文章があり、これにも、「自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する」とした〈序論〉の考え方がかよっているだろう。

つまり、キリスト教を受容する透谷が「宇宙の精神即ち神なるもの」にしたがおうとした、その延長線上に「宇宙感情の　地人　個性と通ずる具体的なる表現」を求めようとした宮沢賢治の態度を、ひとまず位置づけることができるようにみえる。

## 5　あるいは北村透谷という影

けれども、ここに透谷に直に影響された宮沢賢治がいる、というのではない（その直接的な影響関係を証明するような宮沢賢治文書も伝記的資料も未発見である）。ただ、宇宙言説だけでなくその事績においても、ふたりには、時代も場所もしたがって内実も異なるが、次に掲げるように類似するところがあって、その対照によっては、詩人宮沢賢治の特性が浮かびあがってもこよう。[6]

▼北村透谷

一八六八－九四・没後日清戦争

**聖書**

普連土女学校教師[7]（九〇～九三？）

『蓬莱曲』自費出版（九一）

『平和』主筆（八九～九三）

**「内部生命論」（九三）**

▼宮沢賢治

九六－一九三三・没後日中戦争

**法華経**

花巻農学校教師（二一～二六）

『春と修羅』自費出版（二四）

羅須地人協会（二六～二七）

**「農民芸術概論綱要」（二六）**

『聖書之友雑誌』主筆（九三）　東北砕石工場技師（三一）

『エマルソン』（九三・九四刊行）　《文語詩稿》（三二～三三）

自死（九四）　病死（三三）

（なお、少し因縁めいたことを付け加えておくと、透谷は一八九三（明治二六）年八月に花巻の福井松湖牧師を訪問している）[8]

ここには、信仰をもとにして、一方で文学を刻む孤独な作業に向かいながらその試みを世に問い、また一方では、現実社会に対して奉仕的な活動を起こしてゆく、ふたりの生きようが相似的に現われていよう。そして、その生を途なかばで閉ざしてしまった、という点でも、ふたりは重なってくる。

透谷の死のほうが一〇歳も若いが、宮沢賢治も三七歳でやはり早すぎる死だ。透谷の場合、神経を病んではいたが、縊死による明らかな自決である。宮沢賢治の場合、苛酷な精進と過労からきた結核の悪化による死ではあったが、たとえば死の前日にも肥料設計の依頼に応じたほどだから、生への執着はもう断ち切っていたように思える。

そうした死を前に、ふたりは次のような作品を、いずれも他者の眼にふれるかたちで書いている。北村透谷の場合は、「露のいのち」と題したほとんど歌謡体のものだった。[9]

待ちやれ待ちやれ、その手は元へもどしやんせ。無残なことをなされまい。その手の指の先にても、これこの露にさはるなら、たちまち雫ちて消えますぞえ。

吹けば散る、散るこそ花の生命とは悟ったやうな人の言ひごと。この露は何とせう。咲きもせず散りもせず。ゆふべむすんでけさは消る。

草の葉末に唯だひとよ。かりのふしどをたのみても。さて美い夢一つ、見るでもなし。野ざらしの風颯々と。吹きわたるなかに何がたのしくて。

結びし前はいかなりし。消えての後はいかならむ。ゆふべとけさのこの間も。うれひの種となりしかや。待ちやれと言ったはあやまち。とく／＼消してたまはれや。

「露」とは、内部生命にしたがおうとしてきた「純聖なる理想家」として、まなざしてきたものの比喩、と考えることはできないか。すると、この一見軽快な表現に寄り添っているのは、実は虚脱の韻律なのであり、そこには絶望感が忍んでいる、と私には思える。宙づりにされたままの我が理想を、もう終わりにしてくれというのである。[10]

ここでは、評論にみられる変則的な漢文脈から遠く離れ、また「露のいのち」に先行する抒情詩群の定型文語脈とも異なって、これまでの透谷流の文体が棄てられている。俗謡や口語脈を内蔵したこの文体が、たぶんこのときの身の丈にあったことばだったのだ。

「露」といい「消してたまはれや」という。この詩の場は、なるほど抒情的な衣装をまとっているが、それを支える想は、いかにも脆弱で想の形骸が横たわっている、そのような感じがする。想の内実が希薄なのである。余裕ともほど遠い。そこにあるのは、内部生命をいま

や放棄しようとしている詩人のすがたなのではないか。

宮沢賢治のほうは、死の二日前に父にすすめられ、絶筆として、次の短歌2首を半紙に認める。

方十里稗貫のみかも
稲熟れてみ祭三日
そらはれわたる

病(いたつき)のゆゑにもくちん
いのちなり
みのりに棄てば
うれしからまし

この年九月一七日から催された、鳥谷崎(とやがさき)神社による三日間の花巻祭は快晴であり、実際には、稗貫郡のみならず県下大豊作の年となっており、1首めの軽快な表現は、外部の気配と詩人の内部（祈念）とが相乗して得られたものだろう。2首めでは、そのいのちも「みのりに棄てばうれしからまし」という。みのりは実りであり、御法(みのり)である。これが反実仮想表現であることを踏まえれば、今年の豊作が来年も再来年も来るとはかぎらないその現実を見据えて、半生をかけてきた農村の改革も法華経の信行もいまだ途中なのだ、という詩人の意思表示とみなければならない。この表現を支えているのは、やはりあの、

［社会↓・］農村を最后の目標として
只猛進せよ

と定めたところからきている、確固たる想だったのではなかろうか。

優劣とか是非とかをいうのではない。

これらの作品だけで、死を前にした彼らの心境を充分にまた精確につかめるはずもないが、少なくともその趣の異なりほどは指摘できよう。そこに感じられる差異というのは、個人の性格の多様性などに帰してしまうわけにはいかないところがある。個性などでのり超えきれぬ時代という壁が、立ちはだかっていたように思えるのだ。

維新が引き起こした「移動」（「漫馬」）[11]の時代にもたらされてくる暗部を懸命に生きぬこうとした北村透谷と、帝国主義に向かう時代が置き去りにしてきた「農村」という暗部に立ち向かおうとした宮沢賢治とに与えられた、それぞれの試練の異質さである。

## 6　透谷、「実」から「想」へ

明治という時代は、日清・日露両戦争に勝利して、富国強兵という実質を達成する。文明開化の合い言葉による「実」が求められた時代だった。その草創期を北村透谷は生きる。だから、透谷もはじめ、自由民権の政治活動家として凄まじい「実」の世界にあった。けれども、結局彼はそこから離脱する（一八八五（明治一八）年）。その挫折体験や、その後の恋愛、キリスト教入信という出来事が透谷を文学へ誘い、教会との確執[12]のなかで「想」の世界に立ち合っていったようだ。

そのたどりついたところが「内部生命論」であるが、その間の動きはいまは略すこととして[13]、宇宙精神に感応した内部生命の持ち主は、その論を締めくくって、

再造せられたる生命の眼を以て観る時に、造化万物何れか極致なきものあらんや。（中略）何物にか具体的の形を顕はしたるもの即ち其極致なり、万有的眼光には万有の中に其極致を見るなり、心理的眼光には人心の上に其極致を見るなり。

という。「極致」とは永久不変の存在であろうか。それは、神とともにある「想」の具現とも言い換えうるにちがいない。それを手にしうる地位に透谷は立ち得たのだ。それなのに、半年も経たぬうち、あの「露のいのち」にかいまみえるような、内部生命を放棄しようとする詩人のすがたが現われてくる。もっと端的にいえば、透谷はそのとき信仰を喪おうとする最大の心の揺れに立っていたのではないか、ということである。

疑いを導くところのものは、すでに「内部生命論」のうちに巣くっていたようにも思える。

内部の生命は千古一様にして、神の外は之を動かすこと能はざるなり

宇宙精神＝神との冥契を結ぶ内部生命そのものが、神のほかは動かせないという。詩人も哲学者も、どう踏んばったところで神の業に及ぼうはずもないともいう。つまり、詩人透谷はどうしても受動者なのである。平岡敏夫が新保裕司の次の指摘を引いている。[14]

透谷は、内部を発見したのではない。内部を動かす神という絶対的外部をつかんだのである。

「移動」の時代を、「絶対的外部」を戴いて闘う。その意味では、木偶の如く生きようを、[15]一方で「精神の自由」（「明治文学管見」）[16]を人間の本質としてつかみだし高く掲げようとした詩人透谷が、徹底して引き受けられようとは思えないのである。ならば、「露のいのち」と同時期に発表された「一夕観」[17]のなかに、冥契と自由との最後のせめぎ合いを読みとってはならないだろうか。

その終末の部分を引く。

漠々たる大空は思想の広ろき歴史の紙に似たり。（中略）吁、悠々たる天地、限なく窮りなき天地、大なる歴史の一枚、是に対して暫らく茫然たり。

ここには宇宙の精神と向かいあっている透谷がある。しかし、「暫らく茫然」とするばかりで、なにかを語り継ごうとはしない。ここに「『大いなる現実』の一端につらなりつつ、それを凝視、実感している透谷」をみる平岡敏夫は、さらに西谷博之の論を要約して「〈永遠〉の前に立つ〈単独者〉を見出し」「観念としての〈自我〉が〈実存的自我〉に変容した」透谷像を掲げる。[18]だがもう一歩踏みこんでいえば、私には、神との訣別がいまにもなされようとしているかの、これは孤絶した光景なのだと思われてしかたがない。[19]

最後に取り組んだ『エマルソン』も未完成のまま提出をして[20]新たな針路をそれ以上に模索する間もなく、透谷は「我が事終れり」とした。あの「内部生命論」には「（此論未完）」とあったのだけれども、それを超える「想」世界の追求は、その死によってついにそのままに置かれてしまったのである。

## 7　賢治、〈想〉から〈実〉へ

明治という「移動」の時代に、新たな文学を生みだす基盤ともなっ

た、キリスト教という制度のまえで、立ち尽くした透谷は、その徹底した近代的自我によって彼の文学を円熟させることなく、時代の閉鎖性に批判的に立ち向かうあの浪漫性や思想性は、『文学界』の仲間たちにただしく継承されることもなかった。

宮沢賢治も、大正末から昭和の初めにかけてやはり閉塞してゆく時代のなかにあった。かつて妹の死によってその信仰に深く揺れたこともあったが、晩年はむしろ踏みしめながら、童話と詩の制作に集注しつづける。あるいはそれらを「法華文学ノ創作」[21]と認識していたのかもしれないのだが、そのひとつに定稿集としてまとめ差し出した[22]《文語詩稿》があったといえる。

では、それが向かおうとしたさきはどこであったのか。

それもやはり、「綱要」の〈序論〉のなかにすでにみえていたように思える。

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ないわれらは世界のまことの幸福を索ねよう

などということばだ。向かおうとするところは、「まことの幸福」なのである。そして、このふたつのことばの間には、

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じていくことである

とあって（傍線は島田）、直感した宇宙意志に「応じて現に実行する」という能動的に対処することを自らに課している。したがって、再編以後の《文語詩稿》という仕事が、「綱要」の理想を承けた農村改革に向かう〈詩的実践〉としてとらえられてもよいのではないか。

そこには、眼の前にある農民の人間性を回復しようという志が秘められており、抑圧の時代への批判が根底にある。その意味では、透谷が志していたところのやはり延長線上に位置づけられうるとみえる。

もちろん、農民芸術の成立による「まことの幸福」の実現ということが、この《文語詩稿》定稿化の直接の主題であったわけではない。それは詩人にとって到達すべき、

最終のもの　（書簡252c下書四）

ということであって、《文語詩稿》における達成はそこに至るひとつの階梯としてあるにすぎない。「最終のもの」が判然としているのだから、それに向かう行動がもし曖昧なら迷走を招くほかない。

このように考えてくると、宇宙意志なるものが、詩人の内部でまず言語化され〈想〉として定立してゆく、そのことが詩人にとって重要だった意味もおおよそ見とおせるのではないか。《文語詩稿》定稿のひとつひとつがなにを志してゆくのか。それを明確に認識することが「最終のもの」に向かう手順としては先行しよう。もちろんそれだけで〈想〉の先行を説明しえないが、一要因として考えられてよい。

また、〈想〉の定立による詩の場の構築が、さらなる〈想〉の深化をもたらしうるとともに、それが〈実〉に至るためには欠くことのならない前提だ、ということにも気づくべきであろう。〈想〉が〈実〉に至るとは、「まことの幸福」に向かう階梯を一段また一段と着実に昇ってゆくことであり、それは実際に、

人々の精神を交通せしめ、その感情を社会化し遂に一切を究竟地にまで導かんとする　〈農民芸術の本質〉

というものでなければならなかった。

つまり、《文語詩稿》の再編とその定稿化において、詩人がまずは

かった〈想〉の定立が、〈実〉に向かって機能する詩の成立には必要な工程だった。そうして確かに遺されたのが、ふたつの定稿集だったのである。

## おわりに

うからもて台地の雪に、　部落（シュク）なせるその杜黝し。
曙人（とほつおや）、馮（の）りくる児らを、　穹窿ぞ光りて覆ふ。

『文語詩稿五十篇』に収まっている無題の詩稿である。こんなふうにも意をとることができるか。

飢饉（けかつ）の風土にあって、村は運命共同体である。そこでは人々が気概の血脈を連綿とつないできた。いまもそれを受け継ぐ児らがあの黝い杜をさかんに駈けぬけてくる。そして、天空は、児らを、村を、この台地を、輝きながらしっかりとつつみこむ。

これは、「人々の精神」が交通し「その感情」が社会化している村落、〈実〉の具現したすがたをとらえようとしているもの、とみえないか。そのようにみうるならば、いわばこれは、ひとつ上の「意識の段階」を先取りしたものといえよう詩の場なのだ。では、それを支えている〈想〉とは、どのようなものであろうか。

的確に説明するのは難しいけれども、たとえば、「綱要」の〈農民芸術の綜合〉には、

おお朋だちよ　君は行くべく　やがてはすべて行くであらう

という、「連帯と前進と」を呼びかけることばがあった。

この詩稿は、たぶんそこに連なるものなのである。

注（1）宮沢賢治の本文は『新校本宮澤賢治全集』（筑摩書房一九九六～九七）による。なお、『文語詩稿五十篇』の和紙表紙は現存しないが、失われる以前に文言が写しとられて、最初の全集　である文圃堂版（一九三五）に収められた。

（2）ちくま文庫版『宮沢賢治全集10』（一九九五）の「宮沢清六編年譜」による。

（3）「農民芸術概論綱要」は、序論・農民芸術の興隆・農民芸術の本質・農民芸術の分野・農民芸術の（諸）主義・農民芸術の製作・農民芸術の産者・農民芸術の批評・農民芸術の綜合・結論からなる。

（4）『文学界』一八九三・五。本文は岩波文庫『北村透谷選集』（一九七〇）、以下、透谷本文の引用は同書による。

（5）「内部生命論」が載った『文学界』に先行して載る。

（6）高橋直美「北村透谷と宮沢賢治」（北村透谷研究会編『北村透谷とは何か』所収、笠間書院二〇〇四）が両者の信仰を軸に対照をしている。

（7）一八九三年には藤村に代わり明治女学校に（も？）出校する。なお『平和』・『聖書之友雑誌』主筆時代、平和活動や伝道活動の実践者としてあった。

（8）色川大吉『北村透谷』（東京大学出版会一九九四、新装版二〇〇七）、平岡敏夫『北村透谷研究　評伝』（有精堂一九九五）。

（9）『文学界』一八九三・一一。

（10）注7の平岡論は「近世の歌舞伎・浄瑠璃・歌謡などの文体を用いる

方法意識は、〈露のいのち〉に対する『優しくして脆き心』（「偶思録」）による相対化であろう」という。

(11)『文学界』一八九三・一〇。

(12) 槇林滉二『北村透谷研究　絶対と相対との抗抵』（槇林滉二著作集1和泉書院二〇〇〇）の第三章第二節の「(2)「内部生命論」の基底 - キリスト教受容の階梯 -」で、教会（また宣教師）にある談理・形式・独善を否定する透谷が指摘されている。

(13) 注12の同書。第一章第二節の「(2)北村透谷における背理 - 信と不信のはざま -」や第三章第一節の「(1)内部生命論の流れ - 北村透谷を中心にして -」において、おおむね三段階に整理されている。

(14) 注7の平岡論、新保論「透谷における『他界』」（『文学』一九九四・四）。

(15) 宮沢賢治には、〔雨ニモマケズ〕（同手帳）に次の詩句があった。

ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サウイフモノニ
ワタシハナリタイ

これは、農村に起きた不幸に精一杯尽くし、収穫の不安をともに引き受けようとする存在としての木偶の坊である。「ぜんたい幸福にならないうちは」（「綱要」序論）、無私の行為に徹しようという覚悟の表明とみえる。

(16)「評論」（一八九三・四～五）に発表。その「二、精神の自由」に、次のような一節があった。

精神は自ら存するものなり、精神は自ら知るものなり、精神は自ら動くものなり、然れども精神の自存、自知、自動は、人間の内にのみ限るべきにあらず、之と相照応するものは他界にあり、他界の精神は人間の精神を動かすことを得べし、然れども此は人間の精神の覚醒の度に応ずるものなるべし。

少なくともこれは、人間の精神の自由のほうを主としたうえで、他界との照応にかかわる発展性を提示しているだろう。また、注12の同書、第一章第一節の「(1)透谷論理の道程 - 近代開示の一視角として -」において、「明治文学管見」に遠くない「真 - 対 - 失意」（一八九二（明治二五）・七）に「わが内に『我』の全き時にわれは天地よりも大なる矣」とあるのを引いて、槇林氏は「凄まじい「我」尊重論で、それは「天地」より大なると言うのである」と指摘している。近代人／北村透谷の土台には自我の尊重が本質としてあったことは疑いようがない。

(17)「評論」一八九三・一一。

(18) 注7の平岡論。西谷博之氏の論は、「『漫馬』『一夕観』に観る透谷の現代性」（北村透谷研究会編『透谷と近代日本』所収、翰林書房一九九四）。

(19) 永渕朋枝『北村透谷　「文学」・恋愛・キリスト教』（和泉書院二〇〇二）の「透谷におけるキリスト教」で、氏は、

「一夕観」では、「彼と我との距離甚だ遠きに驚く」と書かれる。（中略）信仰、生を支えていた「心」が、土台から崩れていったのだと思われる。

という理解を示して、信仰のみならず、生への執着もまた喪おうとし

ている、ぎりぎりの透谷が現われている可能性を示唆する。

(20) 注7の平岡論第七章、「『エマルソン』未完成問題」参照。また、槇林滉二「透谷と『エマルソン』-その最後の闘い-」(注8の『北村透谷とは何か』所収)は、最終の第六章「エマルソン小論」が「その最後を「斯くの如くエマルソンの地位はカアライルの地位に異なれり。」と結んでいることについて、氏は「思いはやはり「カアライル」にあった」かと推論して、

「エマルソン」を著しながら、どうしても整理しきれない心が最後に噴出したのではないかとも思われるのである。／(中略)もとより、透谷の生はまさしくカーライル的であった。しかし、理はエマーソン的であった。するとそこで問うべきは、それらの展開論ということになる。

と指摘する。透谷は新たな針路を見据えながらも、そこに向かってはもう踏み出すことができなかった、ということであろうか。

(21)『雨ニモマケズ手帳』(135ページ)に次のメモがあった。

◎高知尾師ノ奨メニヨリ
1、法華文学ノ創作
名ヲオラハサズ、
報ヲウケズ、
貢高ノ心ヲ離レ、
2、　(以下記述なし)

(22)《文語詩稿》未定稿を収容していたのであろう黒クロス表紙Cに、

文語詩稿
本稿想未だ熟せず　表現
本より定まらざるもの
発表を要せず

との文言がある。「想未だ熟せず」もの「発表を要せず」という。ならば、「想」の熟した「(定稿)」は「発表を」前提としていたとみてよいのではないか。

(しまだ　たかすけ、島根県立松江工業高等学校教諭、広島大学大学院博士課程後期在学)